第１４３号
令和５年２月号

まな net

教科研究センター便り

高知県教育センター
教科研究センター

【第１４３号　目次】

・教育コラム「磨」
・特集　教科研究センター講座の報告
・お知らせ
・速報

磨

新しい時代のＩＣＴを活用した学びフォーラム
～ＩＣＴ×教育イノベーション　子どもたちと未来を創る～

次世代型教育推進担当

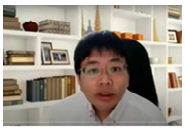
教育センターでは、令和元年度から研修と教育ＩＣＴ展示会を組み合わせた「ＩＣＴ教育フォーラム」を開催し、令和３年度より産官学民連携の「**高知県ＩＣＴ教育コンソーシアム**」で企画運営を行う「新しい時代のＩＣＴを活用した学びフォーラム」に取り組んでいます。本年度は10月８日及び15日の２日間開催とし、集合とオンラインの**ハイブリッド型**で実施しました。参加者は当センターへの来所104人、オンライン参加46人の計150人で昨年度比36%増、校種別では、小・中・特別支援学校の参加者が増加しました。参加者の中には市町村教育長や大学生も含まれており、昨年度より幅広く参加いただくことができました。また、新しい取組として開催後に**オンデマンド配信**を行い、125回の再生があるなど手応えを感じています。

教材体験では、昨年の感想に「教材体験をする時間が無く残念だった」という意見が複数あったことから、体験時間帯を３回設定するとともに、オンラインによる教材紹介も行いました。協力企業は16社に増え、最新の製品やサービスが提供でき、**教育ＩＣＴ展示会**に近づけたと実感しています。二日目フォーラムでは、未来の子どもたちに必要な力を育てる学び改革として、**ＰＢＬ**（プロジェクト型学習）についての講義やアイデアソンを体験し、参加者は活気に溢れワクワクとした学習活動で盛り上がりました。

事後アンケートの結果から、一日目、二日目ともに肯定的評価が80%以上と高く、受講者にとって今後の業務に生かせる内容であったことが分かりました。また、ＩＣＴを活用した授業づくりについても、多くの受講者が前向きに捉えていました。

現在、令和５年度フォーラムに向けて検討しているところですが、**ＧＩＧＡスクール構想**の実現が進む中、１人１台端末を活用した「**学習者中心の学び**」をデザインできるよう、新しい情報に触れ、体験できる場としてさらにアップデートしていきたいと考えています。

東京学芸大学　教授　高橋　純　氏による講演
テーマ「**児童生徒一人一人の学びの質を高める１人１台端末の活用**」
“まず教師がＩＣＴを活用し、当たり前にすることから始める”クラウド活用授業



戸田市教育委員会　教育長　戸ヶ﨑　勤　氏による講演
テーマ「**ＩＣＴ×教育イノベーション～子どもたちと未来を創る～**」
・教育改革のキーパーソン
・教育改革のファーストペンギン
・産官学と連携した教育改革
・自走する教職員集団

◆Google アプリ体験
Google アプリの操作を体験するスタンダードコース、授業での活用を体験するアドバンスコースに分かれて実施

◆教材体験　教育ＩＣＴ展示会（協力企業 16 社）
デジタル教科書や電子黒板、アプリケーションを扱う企業が来所、対面に加え、オンラインで製品やサービスを提供

◆ウェブサービスを利用した質疑応答
質疑応答では、挙手制に加え、ウェブサービス「slido」を利用し、会場参加者とオンライン参加者が意見や質問を投稿

◆テーマ別部会
①高知県教育委員会ＩＣＴ施策部会
②ＩＣＴ活用実践部会
③デジタル教科書研究部会
学校や個人のテーマに合わせて参加

高知大学特任教授　川村　晶子　氏による講演・演習
テーマ「**未来の子どもたちに必要な力を育てる学び改革**」
ＰＢＬ（プロジェクト型学習）とアイデアソン体験を実施
※アイデアソン：アイデアとマラソンを合わせた造語、テーマを決め、アイデアを出し合い、結果を競うイベント

特集　令和４年度　教科研究センター講座　基礎講座Ⅳの報告

「授業づくりで大切にしたいことⅡ」
～話し方と発問等の基礎・基本及び発問づくりの演習と模擬授業～

教科研究センター　本部アドバイザー　　東川　美知子　　野村　貴子

１月 14 日（土）、高知県教育センターで、教科研究センター講座（基礎講座Ⅳ）を開催しました。前半は「話し方と発問等の基礎・基本」の講義、後半は「発問づくりの演習と模擬授業」を行いました。後半の演習では、小学校社会科の教材を使ってグループで発問をつくり、導入５分間の授業展開を考えました。校種や教科の枠を超え、活発な意見交換が行われました。また、模擬授業では、授業者、子供役、授業参観者の立場を体験し、実感を伴いながら学び合うことができました。

その概要を報告します。

講　義

講義１では、教師としての話し方の五つの基本（①教室のどの子供にも届く声で話す、②メリハリをつけて話す、③分かりやすく話す、④子供をひきつけて話す、⑤話癖に気を付ける）について具体例を通して学びました。

講義２では、授業での発問や質問、説明、指示、助言・支援等のそれぞれの役割や発問を生かす説明や指示の仕方の工夫、子供から発言を引き出す手立てなどについて学びました。特に、発問については、子供たちの学習活動が主体的・対話的で深い学びにつながるような発問のポイントを確認しました。発問づくりでは、この発問で問うと「子供はどのように答えるだろうか、どのように考えるだろうか。」など、子供の立場に立って前もって予想すること、また、導入、展開、終末のそれぞれの学習過程での発問のねらいを明確にして発問計画を立てることが大切です。

参観者からは、「声の大小、強弱など細かいことに一つ一つ意味付けができたら、生徒をもっとひきつける授業に近づくと思いました。」、「発問や質問の使い分けや生徒が興味を持つ発問の工夫など、職場ではなかなか聞けない基礎・基本的なことを学べました。」、「今後の授業づくりに大変いかせる内容でした。」などの感想がありました。

それぞれの講義の終わりに、学んだことを参考にして、相手を意識した話し方や発問づくりを体験し、後半の演習につなげました。

・例文を使って、小学生と高校生を対象にして、それぞれの話し方を相手意識（話の内容や児童生徒の人数、場所など）に配慮し、発音や声の大小、話す速さ、間の取り方などに注意して話す体験をしました。
・大きく息を吸って、５メートル近く離れた子供に声を届けるつもりで話すと、はっきりした発音になり、声の調子も明るくなりました。

演習「発問づくり･模擬授業」

《　演習の流れ　》

①　班で話し合いながら、授業の導入部の発問と授業展開を考えています。

・「この図の様子から何か気づくことがありますか。」と聞いてみよう。
・「この行列はどこへ向かっているのだろう。」と疑問をもつのではないかな。
・「馬に乗っている人がいたり、物を持って歩いていたりと行列の人の様子にも違いがあるね。」と行列の様子に気づくのではないかな。

②　授業者、子供(児童)役、授業参観者と分かれて模擬授業を体験しています。

授業者のコメントから
・短時間の中で児童の発言をたくさん引き出すことの難しさを感じた。
・自分が予想していない発言が出たとき、それをどうつなげていくかが難しかった。
・児童の発言をどこまで深く聞くのか判断できなかった。

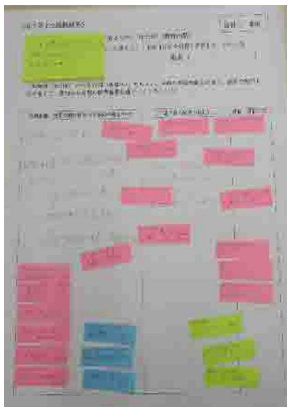
児童役のコメントから

・指導者の声がはっきりしていて、テンポよく進めていた。
・自分の意見を板書してもらうと、嬉しい気持ちになることが分かった。
・児童の意見があまり出ない時は、聞くテンポを上げてみることもいいのではないだろうか。

授業参観者のコメントから

・児童の発言を繰り返すことでさらに考えさせるように努めていた。
・想像図を見て、気づいたことを話させることから次の学習活動につなげようとしていた。
・大名行列の様子だけでなく、行列の周りの人の様子を取り上げることで児童の興味を喚起していた。
・授業者が話すときの立ち位置についても考えることができた。

③　本研修での学びを振り返り、全員で共有します。



班の振り返りから

・実際に模擬授業をしてみて、発問や話し方、児童の意見の取り上げ方など授業者として学ぶことがあった。
・授業のめあてに向かっての学習活動の中で、児童が主体的な学びができるようにその興味や関心を大切にしながら、学びをつなげることが大切と感じた。

おわりに

「話し方の基礎・基本」、「発問等の基礎・基本」の講義では、指導者として教壇に立った時の話し方や発問づくりについて学びました。指導者として話すときは、「相手に伝えたいという思い」をもち、「相手を意識して話す」、「相手に分かるように伝える」ことが大切であることを確認しました。それに基づいての声の大きさや速さなどの話し方の工夫があり、児童・生徒が主体的に学ぶために、学習活動に合った発問づくりが必要であることを学んだようです。

後半の演習は模擬授業を行いました。授業者、授業を受ける側、授業参観者と立場を変えて授業に参加しました。模擬授業後の振り返りでは、「対話を通して児童を巻き込み、考え合う発問を作っていきたい。」、「導入の場面では指導者が子供たちの気づきの発言をつなげて学習課題にするようにしたい。」などの感想がありました。今回は授業の導入部の学習活動の授業でしたので、児童の興味・関心を喚起し、授業の方向性をもたせる必要がありました。授業を行うときはその学習活動の目的を理解し、児童・生徒の意見をつなぎながら、授業の方向性を明確にしていくことが大事だということにも気づいたようでした。参加者が演習で実際に感じた気づきから、どのように発問すれば、児童・生徒が主体的・対話的に学び、やがて深い学びにつながるのかを考え続けていってほしいと願っています。

参考・引用文献

・先生のための「話し方」の技術	玉置崇　菱田さつき	明治図書出版
・先生にこそ磨いてほしい「ことばの伝達力」	加藤昌男	日本放送出版協会
・できる教師の「話し方・聞き方」	村松賢一	明治図書出版
・発問上達法	大西忠治	民衆社
・子どもの学力を高める！秋田県式「授業の達人」10 の心得	矢ノ浦勝之	小学館
・「小学社会６」	令和３年１月 20 日発行	教育出版
・「新しい算数５下」	令和２年度	東京書籍

春季閉室のお知らせ

★3月26日（日）から4月2日（日）は閉室します★

教具の貸出しについて

教科研究センターでは、アーテックロボ、コード・A・ピラー（本部のみ）やボッチャの貸出しを行っています。詳しくは、各教科研究センターにお問い合わせください。

速　報

教科研究センター(本部・東部・中部・西部)

令和５年１月の利用者状況　**303名**

◆◇ご利用ありがとうございました◇◆

《 教育センターの四季：メジロとみかん》

教科研究センター（本部）	高知県教育センター２階（高知市大津乙 181）	TEL/FAX　088-866-3903
東部教科研究センター	安芸総合庁舎４階（安芸市矢ノ丸１－４－36）	TEL/FAX　0887-34-8051
中部教科研究センター	中部教育事務所１階（吾川郡いの町枝川 2410－７）	TEL/FAX　088-893-6597
西部教科研究センター	幡多総合庁舎３階（四万十市中村山手通 19）	TEL/FAX　0880-35-6251

教科研究センターホームページアドレス　https://www.kochinet.ed.jp/studycenter